

報告

現代詩イベント2022

「いま、人生に詩を―『横浜詩人会詩集2021』を読む」

理事 池田高明・三浦志郎

2022年6月18日(土)、主催・横浜詩人会、後援・日本詩人クラブおよび日本現代詩人会で、ラゾーナ川崎プラザソルにて開催した。昨年13年ぶりに刊行され、101名が執筆した『横浜詩人会詩集2021』を記念しベースとした、講演と朗読である。

総合司会はイベント担当理事の池田高明。植木肖太郎理事長の開会の言葉に続いて、来賓として一般社団法人日本詩人クラブ・吉田義昭理事長、日本現代詩人会・佐川亜紀理事長、書の友好団体「書燈社」・宮本博志理事長より、来賓、挨拶を頂いた。

第一部は座談会。パネラーの柴田千晶、藤森重紀、光富幾耶の三氏によりアンソロジー収録作品のエッセンスが浮き彫りにされ、詩と人生の関わりや自己の詩との向き合い方、自作の解説まで、話は多岐に及び、それぞれの個性を感じさせる大変興味深いものになった。

柴田千晶氏は「リアルな手触り」として、『横浜詩人会詩集2021』に関して〈戦争体験、

存在、叫び、現代、人生、言葉、オブジェ、収録作品を7つに分類し、印象的な作品について語る。〈テーマ(いま、人生に詩を)に関して、(自己を見つめる、今を見つめる)と題して2冊の会員詩集をとりあげ丁寧の説明された。

藤森重紀氏は『横浜詩人会詩集2021』に関して〈前代未聞の疫病禍にあつて、その「危機感」が各自を詩表現へと向かわせ、今回のアンソロジーへ集結したのではないか〉として、アンデパンダンのような自由テーマが生きたと指摘された。さらには、村上昭夫や会員発行詩誌などを挙げて、詩のあり方、言葉のあり方を問いかけられた。光富幾耶氏は詩を楽しみたいと強調され、収録作品の数々の魅力を語り、いま詩について考えていることとして、〈残る詩を書いていきたいという気持ちと、いま書ける詩、いましか書けない詩という状況など、踏まえながら、詩を書き続けたい、詩に触れたい、詩に関わりたいという思い〉を述べられた。さらにコーディネーター佐相憲一会長が座談に加わり、失われたものの刻印や表現の多様性、切実なものを書くことなど、四氏の話は広がりを見せた。コロナ禍以来、詩についての本格的な講演は久しぶりの知的味わい

となった。

第二部では、服部剛理事の司会により、アンソロジー収録作品を10名の作者が丁寧に多彩に朗読した。新沢まや、井嶋りゆう、今鹿仙、うめだけんさく、長田典子、草野早苗、田村くみこ、中村不二夫、松浦成友、若尾儀武の皆さんである。ベテラン、中堅、新鋭、とバランスよく配されたそれぞれの立場、スタイル、アプローチは、詩という究極に至るに相通じるものがあり、個性が発揮される場であった。文字が音声に変換される時間と空間に音楽と物語性が立ち上がって来る気がした。

会場はコロナ禍で間隔があるとはいえ、会内外の来客で、用意した机のほぼ満席の盛況となった。堅苦しさはなく、むしろ寛いで柔らかなものとなり、知的楽しみといった雰囲気を感じられた。詩とは孤独な作業だが、この場は人々によって、ひとつの詩状況が作られたと言える。それを象徴するように締めくくりは、佐相会長によって来場客にもマイクが向けられ、和やかな各自スピーチのうちに散会となった。